

中将姫



奈良の二上山のふもとにある当麻寺、その寺に伝わる中将姫の曼荼羅。

中将姫は奈良がまだ花の都と呼ばれていた遠い昔、若くして尼となり、仏の道に短い一生を終えます。

どうして姫は尼になったのか、悲しい姫の生い立ちと運命とは何か。能や謡曲に歌われた物語を背景に、中将姫の伝説を描いた説話戯曲。

CHUJYOHIIME

「中将姫」

時

天平の昔、奈良が花の都といわれたころ

場所

雲雀山（伝説の山）

人物

長谷姫	後の世の尼
少将	同 貴族
豊成	同 僧
白（はく）	同 農夫 1
鮒（ふな）	同 農夫 2

1 雲雀山

雲雀山の山中。

伝説によると雲雀山は紀州と和泉の境にある山であったという。

あたりは緑の木々に覆われた深い森。その森の中で穏やかな木漏れ日に照らされた石の上に、若い農夫の白が座っている。

山道を旅姿の若い貴族が歩いてくる。

少将である。少将は、手に雉を持っている。

少将 これ、ものを訪ねる。

白

少将 雲雀山という山は、このあたりの山のことか。

白

少将 そなた、耳はないのか。和泉と紀の国の間にある雲雀山はこのあたりかと聞いておる。

下手から年老いた農夫の鮒が登場、笑いながら少将に声をかける。

鮒 これは若いお方。石の仏様はちゃんと耳があるけど、

訪ねられてもお答えにはならねえだよ。

驚いて、少将が白のほつをみると、白のかわりに石
仏が石の上に立っている。

鮒 このあたりは確かに雲雀山に違いないが、雲雀山とい
うても広いからのう。お前様はどこからおいでかな。

少将 わしは都からやってきた。雲雀山に長谷姫様が住ん
でおられると聞いて、はるばるこのような深い山へやっ
てきたのだ。そのほう、長谷姫様の住まいを知るまいか
の。

鮒 さて、このあたりに姫様とよばれるようなお方がおら
れたかの。う、白よ、お主は聞いたことがあるかの。

と鮒が先ほどの石仏のほうに声をかけると、不思議
なことに今度は石仏のかわりに白が座っている。驚
く少将、白と鮒の顔を交互に見ている。

白 さあ、聞いたことがないがの。

鮒 姫様がおられるのは都であろう。

少将 いや、確かにこの間までは都におられたのだが、深
い悲しい仔細があつてこの山に入いられたと聞いた。

白 都から来られたのなら、天子様が作られた大仏さまの
ことをご存知か。

鮒 何でも大変な大きさの、雲をつくような仏様が都には
お居でなさるそうじゃ。

少将 そう、そうじゃ、私もまだ見たことはないが、それ
は言いようもなく有難い仏さまじゃ。

白 どうして、そのような大きな仏様を作られたのかの。
少将 それは、天子様が、阿弥陀様の御慈悲の力で、都の
平安と民の幸せがいつの世までもあるように願われて作
られたのじゃ。

鮒 都の平安と民の幸せとな。

少将 そうじゃ、民の幸せじゃ。

白 なるほど、花の都じゃな。

鮒 花の都じゃ。花の都じゃ。

鮒がうれしそうに、くるくるとトンボを切る。

鮒 じゃが、その花の都におられた長谷姫様とやらはどう

してこのような山の中に移られたのかな。

少将 姫は都の高貴な家の生まれだが、その美しさを妬むものの謀りことで都を追われたという。

鮒 なんとそれは気の毒な。花の都も聞けば恐ろしいところじゃな。

白 そうじゃ、この先の森を抜けたところに小屋があったの。そこで聞いてみなされ。その長谷姫様のがわかるかもしれない。

少将 それは有難い。この林を抜けたところじゃな

鮒 そうじゃ、森を抜けたところじゃ。

白 (少将が手にもつ雉を見とめて) その手にお持ちなのは何でござる。

少将 これが、これはついそこでわしが射た雉じゃ。

鮒 (雉を覗いて) それは何と良い腕をお持ちじゃ。

白 ほんにそうじゃの。それにまだ若鳥のようじゃの。

鮒 そうじゃ、そのように手にぶら下げておいでなら熊か狼に横取りされてしまいますぞ。この袋に入れてお持ちなされ。

と大きな袋を取り出して少将に渡す。

少将 これは何と気のことじゃ。重ね重ね礼を申すぞ。(袋に雉を入れ、空を見上げて) なにやら雲行きが怪しくなってきたようじゃの。おぬしたちも用心して山を降りるがよいぞ。

少将が足早に立ち去る。すると霧のようなものがある。立ち込め白と鮒の姿は見えなくなるうちに

溶暗。

2 雉

山中の森の中に小さな小屋がある。
長谷姫の庵で、全体に板塀の粗末な小屋である。
小屋の塀の隅に薪が少し積んであり、木が植わっている。

長谷姫が小屋の前を掃除している。

長谷姫 （空を見ながら） いいお天気。

小屋の前に二体の石仏が立っている。

長谷姫が石仏を見つけて驚いて駈けよりながら。

長谷姫 あら、こんなところに仏様が。でもおかしい。昨日はなかったのに。わかったわ。お前達は白と鮎でしよう。

すると、小屋の扉や窓がバタン、バタンと音を立てて開いたり、閉まったりする。

長谷姫 まあ、またイタズラ。私をからかったりすると許しませんよ。

突然、小屋や長谷姫の周りが霧に包まれ、しばらくして霧が晴れると、白と鮎が長谷姫の前に立っている。鮎は大きな籠を背負い、白は木で作られた樽のようなものを手に抱えている。

鮎 姫、姫、怒りめさるな。（籠を下ろして）ほら、姫がまだ眠っている間にこのように沢山の木の実を取ってきましたぞ。

長谷姫 うれしい。でもこのような大きな木の実は見たとがありません。これは雲雀山でとれる木の実ではありませんね。

鮎 これは唐という国の、そのまた西の崑崙（こんろん）という、高い高い山で採れる木の実じゃ。

長谷姫 （驚いて）そのような遠くの山へ鮎はいつ行ってきたのですか。

鮎 わしはな、まだ日の昇らぬうちに鵬（ほう）という大きな鳥に乗って崑崙の山に行ったのじゃ

長谷姫 鵬ですか。

白 うそじゃ。うそじゃ。鮎は姫をからかっているのじゃ。それは姫、雲雀山の向こうの葛城の山で取れる木の実じゃ。

長谷姫 （鮎をにらんで）まあ、また鮎がでたらめを言ったのですか。

鮎 怒ったぞ。怒ったぞ。姫を怒らしてやったぞ。

鮒が喜んでくるくとトンボをきる。

長谷姫 白は何をもつてきてくれたのですか。

白 (樽を見せながら) わしは海の魚を持ってきたのじゃ。

長谷姫 (樽を覗いて) 何もおりませぬ。

白 さあ、もつと、底のほうを覗いてごらんさいませ。

大きな魚が泳いでいるのが見えるでしょう。

長谷姫 本当に。あんなに深いところにお魚が泳いでいますね。あれは何というお魚ですか。

白 あの魚は鯛というのです。

鮒 姫、白の樽はこの雲雀山から見える「ちぬ」の海につながっているのじゃ。だから、今姫は「ちぬ」の海の底をみているのじゃ。

長谷姫 何と不思議な。あの魚を捕まえたい。(白に) 出来ずか。

鮒 それは無理じゃ。あの鯛は海の底にいるのじゃ。

長谷姫 いいえ。白。私にあの魚を捕まえさせて下さい。

白 やれやれ、わがままな姫じゃ。それではこちらを向いて目をつぶりなされ。それからゆっくりと手を前に出すのです。

長谷姫が後ろを向いて、しばらくして前に向き直る。
。するとその両手に大きな鯛を抱えている。

白 さあ、姫、目を開いてごらんなされ。

長谷姫 (驚いて) ああ、本当だ。大きな鯛がこんなところに。

長谷姫の両手の中で鯛が元気よくはねている。しばらく長谷姫は踊るようにはしゃいでいるが、突然、鯛は樽の中に飛びこんでしまう。

長谷姫 あら、あら、鯛が海の底に。

鮒 (喜んでトンボを切つて) 笑ったぞ。笑ったぞ。姫を笑わせてやったぞ。

長谷姫 面白かった。白、今度は別のものを見せてください。
れ。

白 いいですとも。もう一度樽を覗いてみなされ。今度は何が見えなさる。

長谷姫 (樽を覗きながら) 鳥だわ。そっだわ。あれは雉だわ。

白 あの雉は矢を打たれて死にかけているのです。

長谷姫 誰がそんなひどいことを。

鮒 今、懸命に生きようとしているのじゃ

長谷姫 助けたい。白。あの雉を助けてください。

白 では、また、こちらを向いて目をおつむりなされ。

長谷姫が後ろを向いて、それからゆっくりと前にむきなおる。すると両手に大きな雉を抱えている。しばらくその雉をみて。

長谷姫 さあ、お前の家にお帰り。父さまと母さまのところへお帰り。

言いながら雉をゆっくりと空に放つ。雉はしばらく小屋の付近で羽ばたいているが、やがて空のむこうに飛んでいく。三人が遠くを見つめて雉を見送るうちに

溶暗。

3 花の都

前場と同じ。長谷姫の小屋の外。長谷姫がかがんで庭の草をとっている。

下手から少将が登場。長谷姫に声をかける。

少将 もし、お尋ねいたす。

長谷姫 (顔を上げ) 何でござりましょう。

少将 このあたりに長谷姫様といわれる方のお住まいはござるまいか。

長谷姫 さあ、このあたりは山深いところゆえ貴方様のような方の訪ねるお方がおられるとは思われませぬが。

少将 このあたり、雲雀山で生きておられるとうわさに聞いて、はるばる都からやってきたのじゃが。

長谷姫 (立ち上がって少将に向かい) その長谷姫さまとやらはどのようなお方でしょう。

少将 そなたと同じ年頃のお方で、都ではそれは評判の美しいお方でした。

長谷姫 そのようなお方がなぜこのような深い山の中にお住まいなのか。

少将 姫は悲しいお方なのです。小さいころに生みの母上を亡くされ、やがて父君の藤原豊成様が新しい奥方としてお迎えなされた照日の前さまといわれるお方は酷いお方で、美しい姫の評判を妬んでことごとくつらくあたられたということじゃ。

長谷姫

少将 私が姫にお会いしたのは、二年前の秋、天子様が竜田川にもみじ狩に出かけられた時、藤原豊成さまのお屋敷で歌会を催された日のことじゃ。その日、どうしたわけか 天子は気分がすぐれず、竜田の川音が耳についてご不快のご様子じゃった。そこで、姫様が天子をお慰めする歌を詠まれたのじゃ。

長谷姫 (歌を詠む) 波はよし 竜田の川も 音なくて

天のすめらぎ なやみやめてよ

少将 (気がついて) 姫、やはり姫でしたか。その時、姫は琴を弾かれて天子様をもてなされた。それは美しい琴の音で天子様はすっかりご気分がよくなられて、姫をたいそうほめられたのでしたね。私はその時、お会いした

・・・

長谷姫 はい、少将さま。覚えておりますとも。そういえば少将さまの笛の音もそれは美しく、天子をお慰めしましたよ。

長谷姫が話しながら小屋の中に入っていく。

少将 ところが、その時お母上の照日の前さまは、笙(しよう)を演奏されたのですが、あまり天子をお慰めすることができなかつた。それで、たいそう長谷姫さまを妬んで、とうとう家来のものに雲雀山に姫をつれてゆき、殺してしまうように命じたのです。たとえ、血はつながっていないなくても母は母、照日の前というお方は何と冷たいお方だろうと都ではそれは悪い評判になりました。

長谷姫が水の入った碗を持ってきて、少将に渡す。

少将はしばらく姫をみているが、うまそうに碗の水を飲み干す。

長谷姫 いいえ、家来たちは私を殺しはしませんでしたよ。
。殺すどころかこの小屋に私を住まわせてくれて、朝夕
食べ物を運んで何不自由なく暮らさせてくれるのですよ。
。

少将 そういえば、ここに来る途中で若者と老人の山の
ものに出会いましたが、あのものたちも姫のご家来で
したか。

長谷姫 あの者たちは家来ではございませぬ。それに
あのものは人ではないのです。

少将 そうそう、その時は雉を矢で射て捕まえたので
すが、その者がこの袋に入れて持っていくようにと
。

少将が傍においていた袋をあけるが、中には何も入
っていない。

この前後で一人の行者姿の僧が小屋の陰にやってき
て二人の会話を聞いている。長谷姫の父の藤原豊成
である。

長谷姫 あの雉を射たのは少将さまでしたか。

少将 (なおも不思議そうに) どうしたのだろう。確かに
この袋に入れておいたのだが

長谷姫 あの雉は私が逃してやりました。

少将 え、

長谷姫 少将さま。この山では誰であろうと殺生はなりま
せぬ。私はこの山のもの達に救われました。ですから、

この山のもの達に殺生をするものを私は許しませぬ。

少将 (姫の強い口調に驚いて) 姫。

長谷姫 私は照日の前さまを恨んでも、憎んでもおりませ
ぬ。あの方はいつも何かを望んでおいででした。それが
何なのか、それはよくはわからないけれど、あの方が私
を妬んでいたなどという事は、心ない人の流した流言。
私は信じたくありません。

小屋の陰で二人の話を聞いていた豊成が出て来る。

豊成 姫はどうして照日の前さまなどと呼ばれるのか。ど
うしてあの方などと呼ばれるのか。

長谷姫 (驚いて) 行者様は、どなたでしょう。

豊成 姫は母上のことをどうして、母上と呼ばれないので

す。

少将 長谷姫さまはその母上のために、それは悲しい恐ろしい目にお会いなされたのです。照日の前さまは姫の才知や美しさを妬んでおられたのです。

豊成 そうでしようか。どこの世界に娘の幸せを望みこそすれ、不幸を望む母親がおりましようか。

少将 照日の前さまは姫を生まれたお方ではないのです。

豊成 さればなおのこと、仏のみちびき、神の縁、人の世のさだめで親子となつた娘をいとおしく思わない母がおりましようか。

長谷姫 お父様、もしや行者様は私のお父様ではありませぬか。

豊成 姫は幼くして姫を生まれた母を亡くされた。その幼い姫を励まし、慰めたのは照日の前様ではございませんでしたか。

長谷姫 あのお方は私が幼いころは可愛がって下さったのです。それは私が何も知らない子供だったからなのです。

豊成 そう、そして大きくなられた姫にいつまでも子供のごころの楽しい夢を忘れないようにと願っておられたのです。

長谷姫 お父様、やはりお父様ですわ。

豊成 姫に酷いことをしたのは、むしろその父上のほうじや。あの歌会の後、わしは姫に天子様のお傍にあがるようにと言つたのじや。

長谷姫 酷いことなどと、私は、天子様のお傍でお遣えするというだけで、何やら雲の上にあがるようで胸が震えたのを憶えております。

少将 宮中へあがるのです。たいそうな出世ではありませぬか。姫にとつてこんな良い話はない。

豊成 ところがあのものだけは、照日の前だけは反対したのじや。泣いてわしに言つたのじや。どうか姫を宮中へあげるのをおやめ下さいと。

少将 照日の前さまは姫の出世を妬まれて、家来のものにひそかに姫を連れ出し、雲雀山で殺せと言われた。

長谷姫 いいえ殺せとは 殺せとはいわれませなんだ。

豊成 そうじや、あのものは姫を逃がしたのじや。妬みや、欲望、争いからあのものは姫を守るうとしたのじや。

少将 何ゆえに。花の都の天子様のお傍に仕えるのは、女としては最高の名譽、最高の幸せというものではありません。

せぬか。

豊成 花の都とはかりそめのこと。内実は出世の欲に取付かれた醜い人々の陰謀の世界じゃ。魔物と鬼の世界じゃ。

少将 うそだ。天子は大仏を作られた。都は仏の慈悲に守られた美しい世界だ。

豊成 わしの父や叔父たちは、朝廷で対立していた左大臣長屋王様を謀りごとによって滅ぼされ権力者となられた。しかしそれも長くは続かなんだ。今、父や叔父たちは都を襲っている流行病で次々に亡くなられた。

少将 都のものたちは長屋王様のたたりじやと噂しておりました。

豊成 そして今度はわしが謀りごとで筑紫に流された。罪のないわしを讒言したのは大臣の橘諸兄殿。

長谷姫 お父様が讒言で、知らなかった。私は何も。

豊成 大仏は謀りごとで権力者の地位を得た橘諸兄殿が、父たちや長屋王様のタタリを恐れて作ったものじゃ。

姫、宮中にあがった姫たちの姿がどのようなものかご存知か。呪詛と謀ごとに取り付かれた女達のありさまをご存知か。そなたの母は、そのような世界にそなたを行かせたくはなかったのじゃ。

長谷姫 それで、照る日の前さまは、私のお母様はどうなされたのですか。

豊成 わしが殺した。

長谷姫 ああ、何とひどいこと。

豊成 わしはあのものの心が見えなんだ。姫を雲雀山に追ったと聞いたわしは、怒りのあまりあのものを殺してしまった。わしは姫のもとに許しをこいにここへ参った。そなたの母に償うためにここへ参った。

長谷姫 そのためなのですね。お父様のそのお姿は。

あたりが急に暗くなって、霧のようなものにつつまれる。三人の姿が霧に包まれて序々に消えていく。

霧の中から長谷姫の声が聞こえる。

長谷姫 鮎、鮎、私に都を見せて下され。花の都を私は見たいのです。

霧の中から長谷姫が現れる。

長谷姫 白、白、私に大仏を見せて下され。世界を慈悲の光で照らされるといふ仏様を見せて下され。

霧の中から白の声が聞こえる。

白（声） 姫がそんなに花の都が見たいのなら見せてあげようぞ。

長谷姫が周囲の霧の中を何かを探すように見ている。しかし、長谷姫に見えるのは美しい花の都ではなく、都の隅で貧困と過酷な徴用にあえぐ人々が見えてくる。

長谷姫 （驚いて） 鮒、あの人たちは何をしていますのですか。

鮒（声） あの人たちは都の寺院や大仏の建立のために徴用された人々じゃ。彼らは美しい都を作るためにあのように役人に酷使されている貧しい民人達じゃ。

長谷姫 白、あの大きな荷を背負ってやってくる人達は

白（声） あれは都に自分たちで作った米や、作物を運ぶ人々じゃ。魚や獣の肉を運ぶ人々もいる。みんな都の役所に決められた量の租を決められた期日までに運ばなければ、重い罰を課せられるのじゃ。

長谷姫 白、白、私はこのようなものは見たくはない。はよう花の都の華やかな様子を見せてください。

白 姫、これが都じゃ。民や百姓たちには花の都など、どこにもない。

鮒 そうじゃ。姫、さあ、彼らのために祈りなされ。彼らのために姫は仏になりなされ。

長谷姫の前を、なおも貧しい人々の行列が続く。舞台の中を何かから逃げるように行き惑う長谷姫の姿はやがて深い霧に包まれていく。

——— 暗転。

それから、何十年か、いや何百年か後のことである。
奈良の当麻寺に、中将姫が五色の蓮の糸から織り上げたといわれる曼荼羅が伝わっている。

ある日のこと、一人の若い尼と四人の男が当麻寺で
中将姫の曼荼羅を見ている。

男たちは、若い貴族と年老いた僧、それに二人の農夫であり、それぞれ少将、豊成、白、鮎によく似た顔だちをしている。そして年若い尼は長谷姫にうり二つである。

貴族 あれが、中将姫が蓮茎の糸から織り上げたという曼荼羅ですか。

僧 そう、百駄の馬を使って集めた蓮茎の集め、石光寺の染井で染め上げた五色の糸を使って、一夜で織り上げた曼荼羅。

尼 仏がこの世にあるならば目の前に現れませ、と中将姫様は願を立て、仏に祈られたのです。

少将 そして織られたのがあの曼荼羅。

農夫1 中将姫とはどのようなお方なのでしょう。

貴族 天平の昔、この奈良に都があったころの、都の高貴な家柄の姫君であった。

僧 たいそう美しい姫で琴の名手であったそう。

農夫2 その姫君が何故に尼になられて、この当麻の寺に入られたのじゃな。

貴族 それはわからぬ。ただ言い伝えによれば、姫には酷い継母がいて、幼いころからずいぶんとつらい目にあわされていたとか。ついにはこの継母に山に追いやられて殺されそうになった姫は、危ういところを仏の慈悲で救われたそう。

僧 やがて都に戻られた姫は、尼になってこの寺に入られたという。

農夫1 辛い目にあわれた姫は、世をはかなんで尼になられたのであろうか。

農夫2 現世の苦しみを癒すためにあの曼陀羅を織られたのであろうか。

僧 いいや、そうではない。それは、心なき人が作り上げたただの伝説。

尼 そうですとも。年若くしてこの世の無情を悟った姫は

、苦しんでいる多くの貧しい人々を救おうとされたので
す。多くの名もなき人々の力になるうとされたのです。

僧 まことにそうでなければあのように美しい曼陀羅を織
ることはできませんまい。

貴族 見れば見るほど極楽とはあのようなものかと。

尼 この世の苦難を救いたまえと祈られて、曼荼羅を織り
上げられた姫は、やがて迎えにこられた阿弥陀様や慈悲
の菩薩様たちと西方浄土へ旅立たれたのです。

(幕)